転移性膵腫瘍の一例

◎田中 清美[1)]、草島 梨沙[1)]、佐藤 譲[1)]、齋藤 恵美[1)]、根上 智子[1)]
地方独立行政法人 山形県・酒田市病院機構 日本海総合病院[1)]

【はじめに】転移性膵腫瘍は比較的稀な疾患で、全膵腫瘍中の2%以下と報告されている。今回我々は、腹部超音波検査が診断の一助となった転移性膵腫瘍を経験したので報告する。【症例】60代、女性。既往歴：子宮平滑筋肉腫（3年前）、術後化学療法を実施している。現病歴：前医で胃がん検診の精査目的で実施した上部消化管内視鏡検査にて胃外圧排所見を認めた。胃粘膜下腫瘍が疑われ精査加療のため当院紹介受診となった。スクリーニング目的の腹部造影CTで膵体部に比較的造影効果が強く内部に壊死性変化を伴う腫瘤を認め、精査のためその他の画像検査および病理組織検査を実施した。【結果】腹部超音波検査では膵体部に2か所、42×32mmと径8mmの充実性腫瘍を認めた。腫瘍は類円形、輪郭は明瞭で整、内部は極めて低エコーで最大腫瘍では中心部に等エコー域を認めた。カラードプラでは腫瘍内の一部に血流シグナルを認めた。腫瘍外所見として尾側主膵管の一部で軽度拡張と、脾静脈の圧排像を認めた。また、左腎下極皮質内にも径10mmの境界明瞭で平滑、内部低エコーの腫瘍を認めた。超音波内視鏡では腫瘍と胃壁第4層との連続性はなく、膵体部に圧排性発育を示す充実性腫瘍を認めた。MRIでは膵体部の腫瘍に拡散強調画像(DWI)で高信号を認めた。PET-CTでは膵体部の腫瘍および右腸骨や左腎にも高度な異常集積を認めた。超音波内視鏡下穿刺吸引術を実施し、病理組織検査で平滑筋系の腫瘍と診断された。【考察】本症例はCTでは膵管癌と転移性膵腫瘍の鑑別を要するとの診断であった。術後3年経過しており臨床的には膵管癌が疑われたが、腹部超音波検査による腫瘍の質的診断や腫瘍外所見、および腎転移を疑う所見は両者の鑑別に有用であった。転移性膵腫瘍の超音波所見は原発巣の性状を反映し明らかな特徴像を示さず、膵神経内分泌腫瘍や膵腺房細胞腫瘍と類似する。本症例も画像検査のみでは鑑別困難であったが、多臓器転移を伴う点は転移性膵腫瘍を疑う根拠になると考えられた。【結語】子宮平滑筋肉腫由来と考えられる転移性膵腫瘍の一例を経験したので報告した。膵充実性腫瘍を認めた場合、既往歴を考慮し転移性膵腫瘍の可能性も念頭に置いて検査を実施する必要があると思われた。連絡先：0234-26-2001